

『私の3.11と明日への備え』

▶問合せ 危機管理グループ ☎079(435)0991



講師 草貴子さん（市名坂東町内会会長）
宮城県女川町生まれ。生まれてすぐ、昭和35年5月24日に発生したチリ地震津波で宮城県女川町も津波の被害を受け、実家が半壊。昭和61年の8.5水害の土砂災害でも、実家が山津波により流されました。そして、東日本大震災の津波により再び流されました。

播磨町では毎年、自主防災組織の育成と地域防災力の向上を目的として、自主防災組織合同研修会を開催しています。今年度は、12月14日に中央公民館で、仙台市から、市名坂東町内会長の草貴子さんを講師に迎えて講演をしていただきました。

当日の内容を一部抜粋して掲載します。

市名坂東町内会の紹介

市名坂東町内会は、仙台市の泉区東部に平成20年に設立した、現在加入数186世帯の町内会です。

平成22年に完成した集会所は、最初から緊急時の避難場所として防災を強く意識し、工夫を凝らしました。

町内会の3つのスローガンの中に、「防災」、子育て支援、「ふるさとづくり」とありますが、「防災力」には特に力を注ぎました。

身の丈にあった町内会、オリジナルティーのある町内会、そして、女性であってもひろまなことを心に秘めて、街をつくるのに核なるものを、人が集まる場所、人を集める場所がなくてはならない。銀行にローンを組んでもでも集会所建設にこだわったのはそんな思いからです。

普段の町内会活動においても、活動出来るのは主婦だけで、高齢者も少ない実情から子供会以外の組織はあえて作ってはいませんので、町内会（イコール）自主防災（イコール）婦人防火クラブといったところでは、

東日本大震災の初動

3月11日午後2時46分の地震発生のおと、急いで自宅に戻り集会所に行きました。すでに女性と子ども、100人が避難していました。

その頃から吹雪になりました。まず、4人の役員で備蓄米

の設定、暖をとるために家から毛布などを持ち込み、段取りを話しました。避難者の大半は町内会に未加入のマンション住民でしたが、会員も会員外も問うことなく、みんな受け入れました。避難者の中からリーダーを決め、町内会はサポートする形をとり運営をはじめました。皆さんの前でリーダー、副リーダーを紹介し、指示に従うよう話しました。

顔見知りではない同士のなかで、毎日午前と午後2回コーヒータ임을設け、交流を図りました。

避難者の中から、大学生と高校生が「何か出来ることを」と申し出があり、「寺子屋」という形で子どもたちの勉強の面倒を見てもらうことにしました。女の子は、小さい子の子守りをしたり、男の子は公園でおいご

つこをしたり、それぞれができることを一生懸命していたように思います。

震災時に起きた事を日常に活かす

東日本大震災での経験を未来に繋げるためにどうするか、問題点や反省点を洗い出しました。その中で、「町内会に入会していないマンションの人たちをどうするか」、多くの町内会のそうした声が聞こえました。

町内には、転勤族で若い家族が多く、親戚もいない。夫が会社に出勤している間に災害に見舞われました。このような経験から、その年の11月から未就学児を持つ若い母子を対象に週1回2時間、集会所を開放して子育て支援を始めました。

平成24年4月には、「全国おもちゃ図書館」に町内会として申請し、加盟が認定され、「おもちゃ図書館すんだっこ」が誕生しました。「すんだっこ」は宮城の名産すんだもちから取りました。「おもちゃ図書館」に加盟してからは、世界中のおもちゃメーカーからおもちゃ、出版社からは図書を寄付され、今

は、たくさんのおもちゃや本があります。

年間1千500人の人が利用するなど、少しずつですが「すんだっこ」だけに加入していた若い世帯も、町内会に入ってもらえるようになってきました。

毎年1回のおまつりの時は、お国自慢と称して必ず3種類の鍋を作っています。宮城県の豚汁はもとより、青森県のせんべい汁、秋田県のだまこ汁などを作っています。

こうした多くの人が集まるタイミングを活かして、同時に防災訓練も開催しています。消防署の指導のもと、簡単に誰もが行える訓練を大人から子どもまで参加して、実施しました。

避難所開設運営委員会の発足

市名坂小学校校区には1万名以上の人が住んでおり、小学校を拠点とした町内会、連合町内会、市民センター、児童館、民生委員、青年団、PTA、婦人防火クラブなど、20の地域団体があります。こうした組織を取りまとめ、平成25年度に避難所開設運営委員会が発足

しました。行政に頼るのではなく、私たち地域住民一人ひとりの声を聞きながら、私は初代事務局長として邁進しているところです。

委員会では、市民センターや児童館などの施設との情報共有化、救護班、総務班、情報班などの各班の具体的な活動内容の充実化を計り、スムーズに運営ができるようにしています。そしてまた、女性ならではの視点を大いに生かす女性リーダーネットワーク部門を設けたことが大きな目玉です。

自分たちの住む地域に合ったことを考える。企業を巻き込む。地域を巻き込む。それが大切なことです。行政が行うこと、できることは限られています。私たちの避難所をどう運営するのが一番良いか、私たちが考えていかなければなりません。

私と東日本大震災

私は地震発生時より町内会長として避難場所の集会所に入りましたが、活動する直前、私の故郷女川町に住む年配いた両親、単身で東北電力女川原子力発電所勤務の夫のことがどうしているだろうと頭をよぎりました。

翌日になってからやっと、「女川町は壊滅。町役場とも連絡が取れず、被災状況は不明」とだけラジオで流れました。この情報化社会の中で、電話も通じず、ほんの50キロ先のまちの様子に分らないこと、そして「街が壊滅した」との言葉からは、何も想像することができませんでした。

女川町は人口約1万人の小さくも活気に満ちた、賑やかな漁師町でした。その人口の1割強、1千人も亡くなったり行方不明になったり、そして離れてしまったのです。人口の減少率は全国ワースト2位と、震災を通じて町民の3人に1人が町からいなくなってしまうほど津波は19歳でした。津波はみんなみんな呑み込み、一瞬にして多くの人の人生を変えてしまったのです。

文字通り、女川の町は跡形もなく消えてしまいました。でも今、女川の町では皆一生懸命、町のため、人のため、自分のためと、大人も子どもも精一杯生きています。復興のテンポも比較的早く、「復興のトップランナー」と言われています。

結び

誰もが経験したことのない千年に一度と言われる大震災の中で、それぞれの役目をみんな自分なりに一生懸命に果たしました。子どもだからとか、男性だからとか、女性だからとかではなく、私の役目、あなたの役目、みんな違ってそれでいいと思います。

私はこれからの自分の役目は何だろうかと、考えて考えて悩みました。この、とてもよい震災を受けて、人間の無力さ、生命の尊さと儚さ、哀しみの受け止め方、人の優しさを感じました。生かされている私たちはしっかりと生きなければなら

ない。自然災害に立ち向かうことは難しいけれど、「防災」や「減災」について考え、実践する。そして一時、一瞬を大事にしていかなければならない。それが私の答えです。

災害は、何時、どんな時やってくるかわかりません。暑い時か寒い時か。晴れの日か悪天候の日なのか。旅行中かも知れないし、お風呂に入っている時かも知りません。でも、いかなる時に被災しても、自分や仲間を信じて、自分の役目をきちんと果たして、地域と共に歩んでいきたいと思います。

最後になりますが、地域防災の大事なことは、自分たちの特性を考えて、オリジナルティのある身の丈にあったものを実践していくことだと思います。

また、「防災」、「減災」を考えていくと、いきつくところは「健康な身体」が大切だとつくづく感じます。逃げるにも、避難所でも足腰が丈夫だと良いです。

どうぞ、お身体を大切に優しく鍛えてください。

